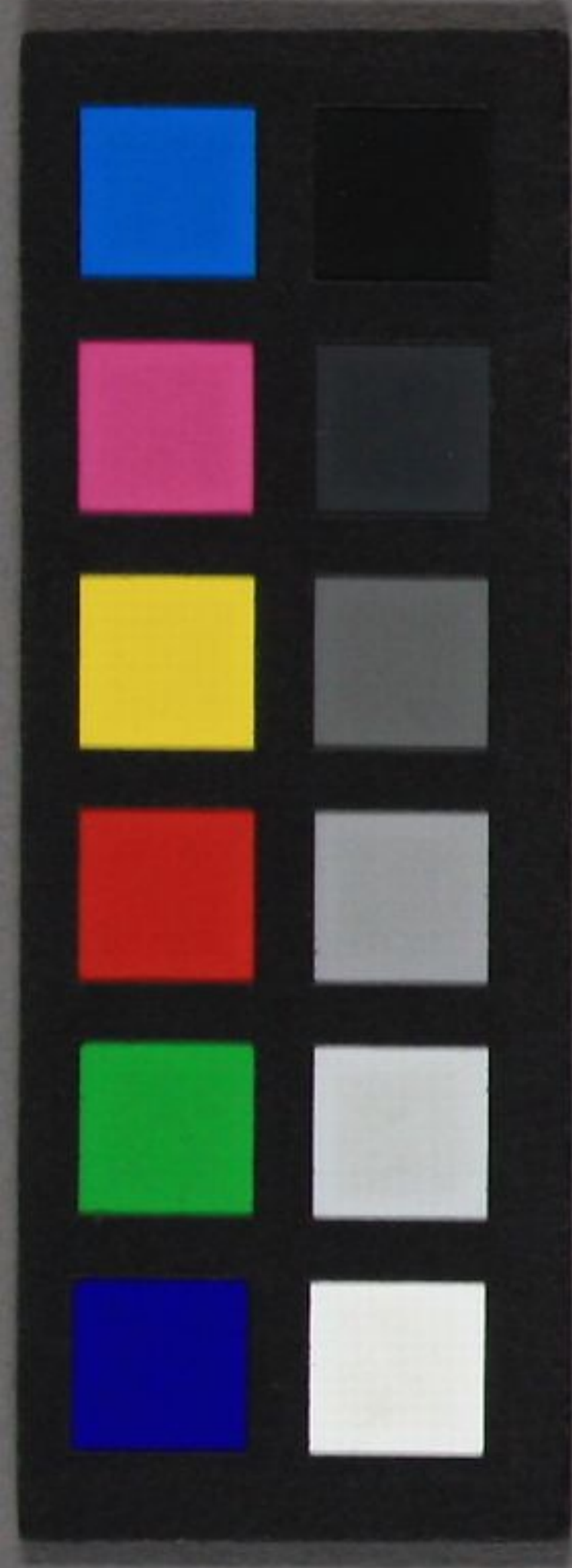


淡煙一
赫



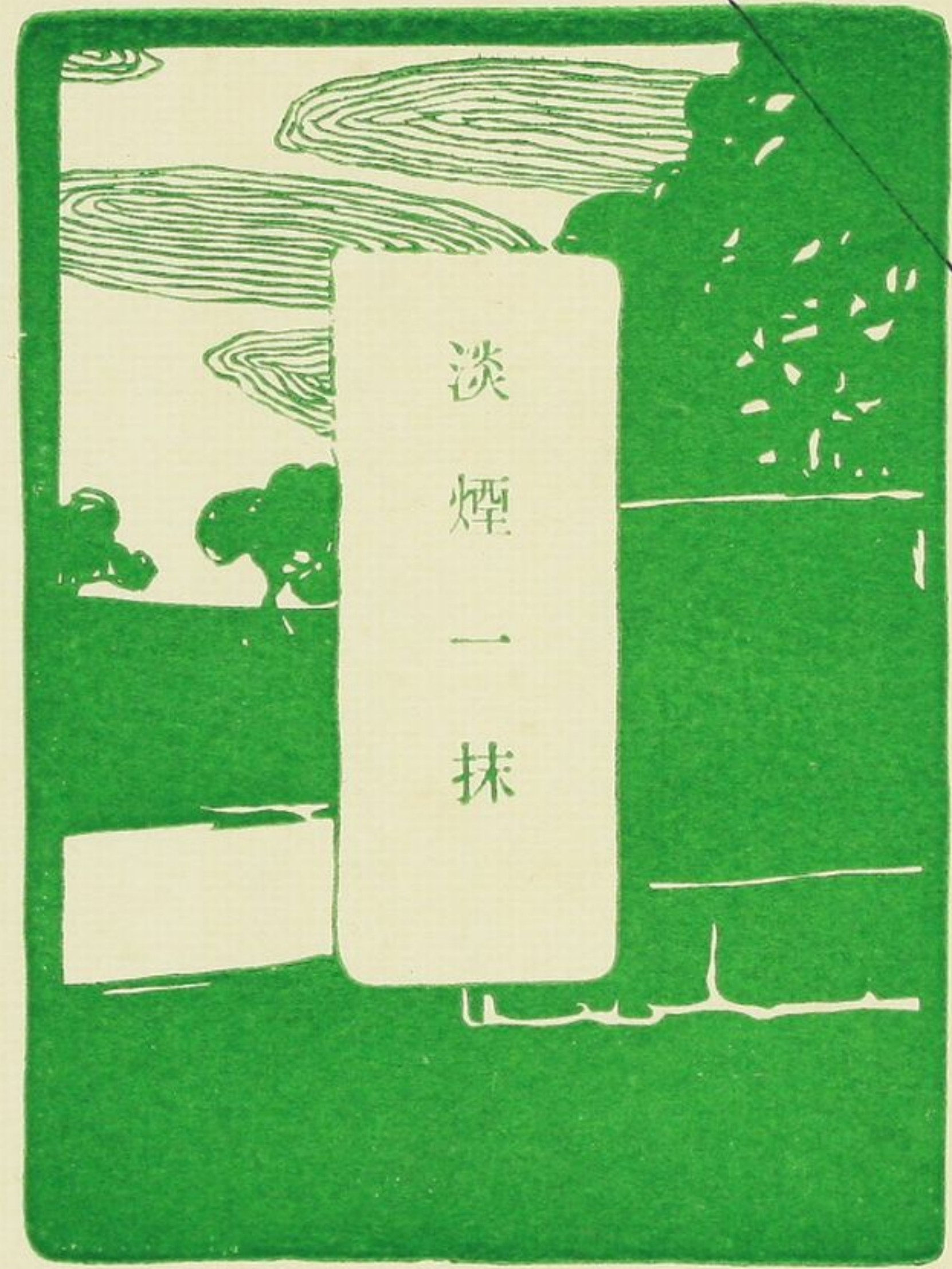
W.C. GIBSON







W. C. C. Co.



淡
煙
一
抹

早計の

お約束しませう

かたじけなく

志法を誦す。

一歩も遅く

休む間もなく

新緑日に加はりて、志貴伊駒のやまくも、かくれむとする庭樹の
かげに、此原稿した、めをへつ。かゝるつたなき歌どもをめでよむ
人々も、世にすこしはおほすらむと思へば

筆おきて神よいのりぬ此ふみを

よむわが友よさいはひあれど

宗
治

淡煙一抹 前篇

新體詩集目次

○壇の浦……………一
○剖見刀……………四〇
○友を送りて……………四七
○コロムブス……………四八
○君とわれ……………六

淡煙一抹 後篇

短歌集目次

四季の部

○春	一
○夏	二
○秋	三
○冬	五

○王照君	八〇
○沖の嶋	八一
○母と子	一四

雑の部

○天地類(天、地)……………六五

○自然物類(動、植、礦)……………七二

○雜品雜事……………八〇

○人物人倫類……………九一

○神儒宗教類(神、儒、佛、耶)……………九六

○詠史附物語句題類……………一〇三

○羈旅軍事離別類……………一二七

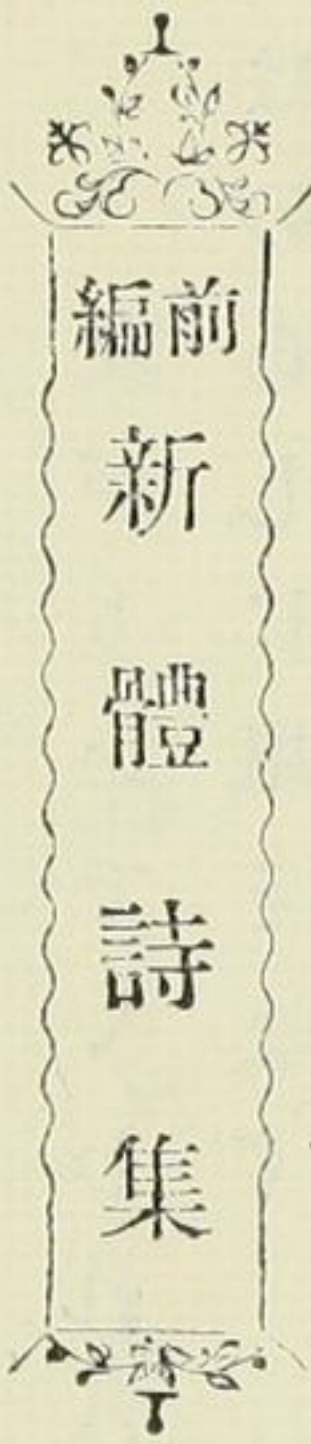
○叙情類(祝賀、哀傷、述懷等)……………一三五

此分類はたゞ記載の順序を立てしまでにて、もとおほかた題詠のうたな
られば題こはやゝたがへるもあらむ讀者諸君子その心してよ



淡煙一抹

淡煙漁史 都築宗治著



○壇の浦

花散る 夕べ 豊浦の

(一)

友がりいでしわれひとり

みぎはのあしに風そよぐ

はまべの道をすぎゆけば

(二)

そらに横たふあま雲を

もれくる星のかげうすく

よせてはかへす白浪の

おと静かなり壇の浦

(三)

しほの流れも早どもの

せとにゆきくの船たえて

ふりさけ見れば文字がせき

和布刈のやしろうちかすみ



(四)

けぶりこめたる田の浦の

いり江に消えてまた見ゆる

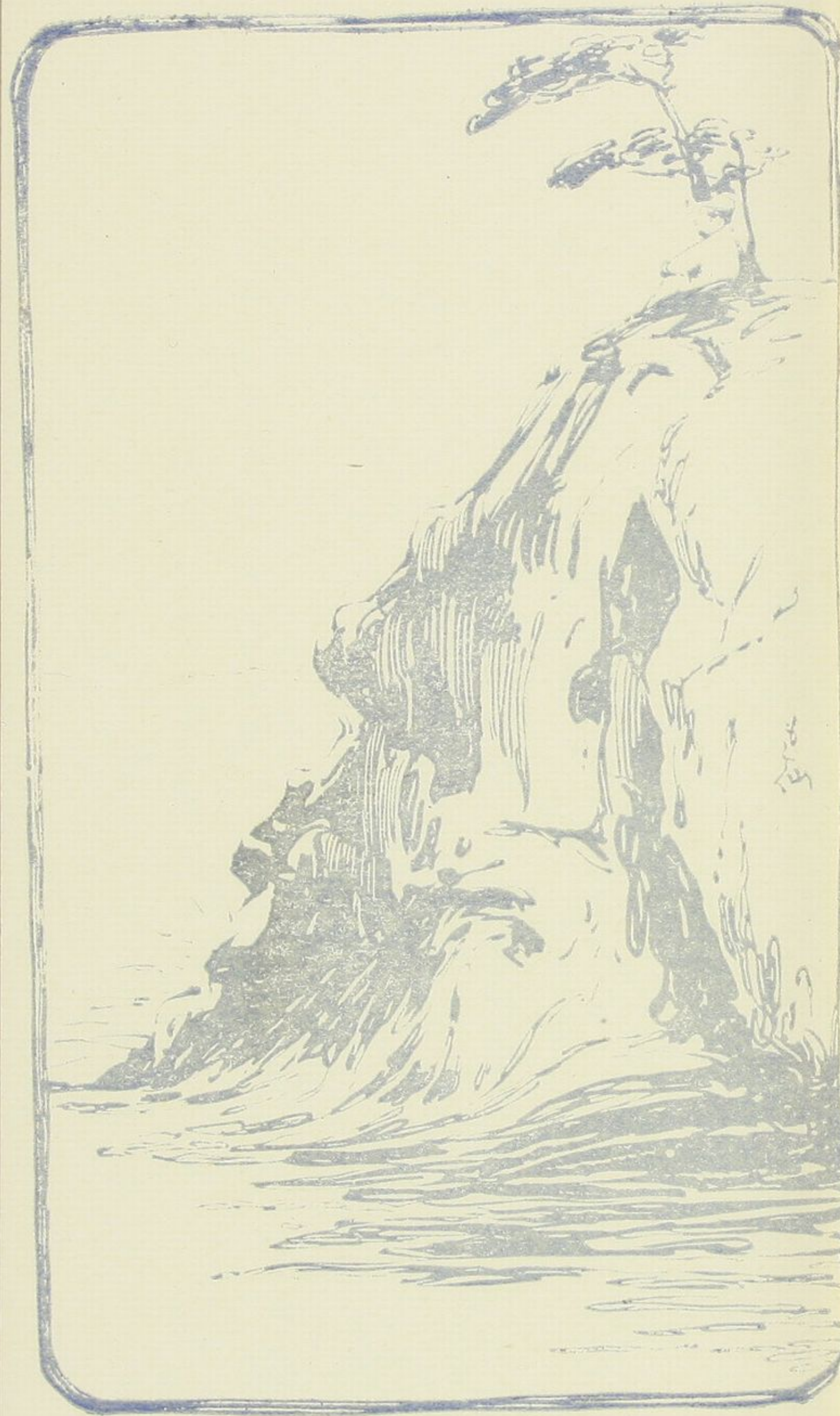
火影はあまの漁火か

砲臺のきし沿ふて行く

(五)

硯の海にくれなるの

ゆふ日のなごり今うせて



いそ松一 枝 た る

むらさきにほふ鎮西の
やま／＼くろむ春のくれ

(六)

いそ松一つ枝たる

洲さきの岩に立ちのぼり

たまくらしつと眺むれば

吾より外ほかに人もなく

(七)

澄^すみゆく心おのづから

この世はなれて海原^{うなはら}に

榮花のゆめのしづみけむ

壽永のむかししのばるゝ

(八)

たちてはきゆる泡沫^{うたかた}の

はかなきものは人のみこ

動かぬそらをうちまもり

思ひつかれてまごろめば

(一九)

葦ふく風も浪おとも

いつしかあれて七ますの

星かげかくすうき雲は

いそがはしくも立ち迷ふ

(二〇)

かなたに見えし浦々の

ながめも暗につままれて

はるかにおこる矢さけびの

こゑあやしくもきこゆなり

(二一)

紅石山のよ嵐か

御裳溜川の水音か

なにぞとばかりみ渡せば

ふたしびあがるときのことゑ

(二三)

その矢さけびのやうやくに

近づくみればこはいかに
くれなるのはた押したてし

兵船およそ五百艘

(二三)

扇かざして沈む日を

かへすばかりの一門も

さかりしものは衰ふる

世のことわりにもれずして

(二四)

西八條の玉樓も

今は淺茅が原なれや

おしおとされし一の谷

吹きはらはれし志度の濱

(二五)

いきほひたけき敵軍に

追ひせまられて入り汐と

ともに退く壇の浦

いそ山近くこぎ寄れば

(二六)

あかまがせきや文字が關

こゝにも並ぶ白はたの

もとに集まる數千騎

すはのがすなと攻めかゝる

(二七)

きのふの詩歌管弦も

けふは練羽のかぶら矢の

ひゞきとかはる船のうち

いづこによらむ島もなく

(二八)

浦かせさわぐふなばたに

千尋の海をながめつゝ

なげく官女のおもかげも

うつろひはてし花のいろ

(二九)

頃は彌生のすゑつかた

老い鶯の聲かれて

散りうく櫻ひとひらに

春の別れは近づきぬ

(三〇)

譜代恩顧のものゝふも

のこり少くなりゆきて

平家の運も散る花と

ともに沈まむこのゆふべ

(三二)

阿波の民部はそむきたり

九州四國のつはものも

かまくら勢にうち靡き

海をおほふて進みくる

(三二)

命數つきし此いくさ

かねて期したるをはりなり

いきある限りひと刀

たゞ義經をうちて死ね

(三三)

うちて死ねやと知盛が

ことばのもとに能登の守

白柄しろへのなぎなたたばさみつ

敵をのぞんで衝きいれば

(三四)

十萬の兵守るとも

めざす九郎4をのがさむや

つゞく盛嗣5景清6が

いざ船こげとたけりたつ

(三五)

玉とくだけて阪東の

夷えいのきもとをとりひしげ

丈夫ぢゆうぶの最期さいごいま見よと

競ふ士卒のいさましさ

(三六)

いく千萬せんまんのをたけびの

こゑうちごよむ浪のうへ

血しほは海にみちくゝて

とぶ矢は雨にこそならず

(二七)

ふくろのねすみものくゝし

もらさずとれと源軍の

雲霞の如きいきほひに

たつ赤旗のいろもなく

(二八)

たのむ勇士はみないで

武者多からぬ御坐船に

敵のつはもの五六百

はやひしぐとよせにけり

(二九)

あなやとばかり騒ぐとき

新中納言知盛は

まなじり開き髪たちて

ちがたな拭ひかへりくる

(三〇)

御運ごうんもいまは定まりぬ

けがれしものは疾く捨てど

てづから塵をうちはらひ

しづかに衣紋えもんつくるへば

(三一)

つねにかはりしみ氣色けしきや

いくさの様さまはいかにぞと

心もよわき女房にようぼうの

右左より問ひすがる

(三二)

さな驚きそ此ふねに

東男とうなんのやさすがた

やがて訪ひこむみたまへと
事もなげなるゑみのまゆ

(三三)

あすをもまたぬ玉の緒に
その戯言は何事と
かなたこなたに泣きさけぶ
こゑあはれなる船のなか

思ひ設けし死出のみち

(三四)

ゆくべき時はきにけりと
しづくいづる二位の尼

ねりぎぬのすそかきげつと
(三五)

腰に寶劔こわきには

神璽をはさみかしこくも

主^{ぬし}上をいだきまゐらせて

ふなばた近くすくみよる

(三六)

おひさきこもる雛鶴も

やとせの春を限りにて

まだきに消ゆる白つゆの

玉のみすがたにほやかに

(三七)

ゆらぐ黒かみうるはしく

龍顔すこし傾けて

いづこにわれを伴ふと

訝^{いぶか}しげにも問ひたまふ

(三八)

君みたまへや此船は

あやうき事のせまりきぬ

八重の汐路の底ゆけば

あなたに龍のみやこあり

(三九)

あまつみ神のすゑうけて

み代しろすべき大君も

すぐせのえにしいかかせむ

いざおんともときこゆれば

み齡にまさるあはれの

(四〇)

かへらぬたびとおぼしけむ

おほみ心のけなげにも

教をふるましくに伸あがび上り

(四二)

東にふしてわたらひの

やしろにいとま告げたまひ

西にふしてはのりの道

みだの來迎^{きよう}まちたまふ

(四二)

いたましきかな萬乘^{ばんじやう}の

みかごを抱き二位の尼

南無そばかりにとび入れば

あとにうづまくしほけぶり

(四三)

かくとみるよりおくれじと

國^{II}母建禮門院も

硯たもとにおし包み

浪の奥にぞいそがるゝ

(四四)

のこる平家の一門は

はや是までと抱きあひ

碇を負うてこゝかしこ

しづむ浪おとすさましや

(四五)

はや乗りよせし東武者

ともに死なむと躍り入る

佐の局つねねのひのはかま

熊手くまてをもつてひきとめつ

(四六)

いだき持ちたる唐櫃からひつを

怪しきものと奪ひとり

中はなにぞとうちよりて

開かむとするかしこさに

(四七)

捕はれながら時忠ときただは

内侍所ないしにおはするぞ

匹夫の見べきものならず

こころせよやと叫べども

(四八)

かちほこりたるつはものゝ

いかできくべき穢れ手に

かたくとざしゝ此小櫃

ふたも裂けよと強てひく

此時とびらのすきまより

(四九)

白氣一道たちのぼり

雑兵まなこくるめきて

血を吐き死ぬる恐ろしさ

(五〇)

ふきおこる風なまぐさく

星はくだけて海に墮ち

神も怒るかあらなみは

さかまき立ちて天に入る

(五二)

大海たいかいひらきりゅう龍王りゅうおうは

焰ほのをふみていで來らむ

面おもてをおほひくる潮しほに

愕然として目さむれば

(五二)

たゞよふ船もよあらしも

きえて七百しひゃん春秋しゅうしゅうの

夢のあとなる磯松や

下したつゆ寒きいはの上

(五三)

空みあぐればあまぐもを

もれくる星のかげうすく

よせてはかへす白浪の

おと静かなり壇のうら

註

- 1、阿波の豪族田口成能
- 2、從三位參議權中納言平知盛
- 3、正四位下能登守平教經(清盛の弟教盛(門脇殿)の三男なり)
- 4、九郎判官源義經
- 5、越中二耶盛嗣(盛俊の子)

- 6、上總惡七兵衛景清(藤原忠清の子)
- 7、宮中奉侍の諸嬪
- 8、清盛の室名は時子
- 9、安徳天皇
- 10、伊勢大朝
- 11、高倉天皇の皇后、御名は徳子父は清盛
- 12、神鏡を奉安せるなり

◎ 剖見刀歌

〇〇〇〇子年十九容姿花の如し昨冬たまく病に罹りて吾が〇〇〇〇〇〇〇
〇に投ず抑も吾醫院の制たる(中略)亦其自費によるものといへども患者及び家族の承諾をうれば則ち之を剖見して病理學の研究に資するを法とす〇
〇子病日に篤く療法百方効を奏せず五月十二日晚來脈搏特に結滯す將に皮下注射を試むる吾手を握つて曰く「妾起らず世間妾の如にして苦しむ者も亦多からむ願くは妾が屍を解剖して同病の者を治する參考とすたまへ」と言ひ了りて復口を開かず夜半に及びて一縷の命脈は終に絶ゆ超へて六四日〇〇病理解剖室に於て式によりて剖見を行ふ予患者母子と入院以來相識る久し偶執刀に際して惻々の情禁じ難きものあり依つて左の一篇を賦し

て聊が之を吊ふと云ふ

(一一)

吹くべきさともおほかるに

よそには吹かで罪もなき

花のみ散らすさよあらし

あなあやにくの浮世やな

(一二)

にほひこぼるしおもかげも

みのいたつきにたへ兼ねて

ひとひく／＼にやせほそる

姿よなにしたとへなむ

(三)

君がやまひをとほむとて

まくらべ近く立ちよれば

さびしき眼そと開けて

われを見し夜も夢なれや

(四)

こゝろづくしのかひもなく

ゆふべのつゆと君きえて

そのなきからにほりけん割見刀

あつべきけふとはなりにけり

(五)

肩にあまれる黒かみや

生けるが如き姿には

とぎすましたるこのやいば

いづこをさして切らるべき

(六)

されどひらけし今の世は

醫イのみちを進めむと

君に倣イひておのが身を

さくぐる人も稀ならじ

(七)

くろかね寒き臺上に

身をさくぐるも人のため

やがて検査シもはつべきに

しばしのほどはゆるせ君

(八)

けがれし臟腑もきりさきて

洗ひ終らば今よりは

また清き身となるべきに

しばしのほごぞよきか君

(九)

氷のやいばいま執りて

2 正中線をわれ引けば

落花の風はまごうちて

なきゆく鳥のこゑかなし

註

- 1、髭見終る時は丁寧に臟腑を還納し切開部を縫合し皮膚を清拭して血痕を去り櫛を執つて髪を理む體中の病竈を一洗して全身復清きを得
- 2、茲に謂ふ所の正中線は頭部より刀を下しアダム氏球胸骨劍狀突起を踰えて臍窩を左方に避け恥骨縫際の處に達する長き切開線なり

◎友を送りて

月と花とのたよりだに
しらす心のかはらずば

かさなる雲はへだつとも
二人が中は近からむ

◎コロムブス

(一)

蒼茫たる大西洋
萬重の波極みなき

中に漂ふわが船は
げに一粟に似たる哉
すぎこし方を眺むれば

雲烟遠く眼も迷ひ
ゆくてのぞめはわたの原

天につゞきて島みえず

(二)

蒼茫たる大西洋

あめつちのうち在るものは

伴ひ進む三艘と

中にのりたる九十人

人に餓ゑたる大鱈鮫の

逐ひくる外に友もなく

ゆくて望めばわたの原

天につゞきて島みえず

(三)

スペインをでし八百里

幽靄かゝるアゾールの

島をしりへになほ走る

九萬鵬程雨に遇ひ

風に裂けたる征帆も

いつしかそよぐ秋のこゑ

くらす日数はつもれども

のぞむ陸地のかげもなし

(四)

肅殺しゆくさつとしてさえ渡る

無量無邊の大ぞらに

燦さんたる星はつらなりて

のぞみを吾に示す哉

この天象と地理をみて

世界は球まるきものなりと

十年じゅうねんとりし吾説を

今試たのすべくなりぬれど

* * * * *

(五) (水手)

陸くわの見えぬもことわりよ

此世のはてのアゾール島

尙その西を極むれば

悪龍くわん蛇だ毒をはく

羅刹らさつの國に至るとか

限りもしらぬ大わたの

浪路をただにわけ行きて

をはりはいかになるか抑おさも

(六)

げにさとりたり昔より

警めおきし西の海

渡る無謀の企を

いつまでとてか助くべき

百人近き命をも

危地にさそひてかへりみぬ

いで剛愎のコロナブス

彼を殺してかへらばや

* * * * *
(七) (コロムナス)

ゼノアの街にかへりては

市民に狂どのくしられ

リスボン港にいたりては

かの國王にはかられて

聚ふ困苦も事とせず

十年とりし新説を

今試すべくなりぬれど

* * * * *

(水手) 彼を殺してかへらばや

(八) (コロムナス)

自ら起ちて世の人の

夢をさまさむとばかりに

さまよふ山河幾百里

吾子擁きて食を乞ひ

うゑにせまりて地圖をうり
十年とりし地球説
今ためすべくなりぬれど

（水手）彼を殺してかへらばや

（一九）

汝が説く所真ならば

此スペインとさし對ふ

下なる國の雨雪は

地より天にや降るらむと

大臣等には笑はれて

屈せぬ地球地動説

今ためすべくなりぬれど

彼を殺してかへらばや

笑へば奮ひ打てば鳴り

（二〇）
とめてもやまぬ志

天の恵か聰明の

イサベラ后ごうに助けられ

珠玉をうりてたまひたる

船のりいだし吾説を

今ためすべくなりぬれど

彼を殺してかへらばや

（二一）

遺憾なるかな六句の

海上島もみえざれば

股肱とたのむ水手等は

征棹せいさう嘔啞おうあの聲よわり

面に危惧の色ましぬ

今もかなたに叫くは

いで剛復のコロムプス

彼を殺してかへらばや

さらやくふなこ皆いでよ

怒れる者よしばしきけ

汝が生命をしきごと

我も生命は惜むなり

汝が徒勞厭ふごと

誰か徒勞を好まむや

しかはあれども此航途

きさきの命ぞ國の爲

(二三)

嗟あはれ呼よいかにせむかくばかり

説とげど疑あやふ汝等なんぢらに

長くは請まがはじいざ水手

唯ただけふ迄までも伴ともひし

よしみ思おもはは是故ゆゑに

辛酸しんさん五十七年ごじちねんの

身みをさくげたるコロムブス

せめてはゆるせいま三日みっか

(二四)

三日待たむの約なりて

また走りゆく三みつの船

風かぜ颯さつと帆ふねをふけば

きのふの雲は遠くなり

蒼波前途そうはなに重かさなりて

むなしくのぞむあすの雲

三日^みか とたのむけふの日も
くれてかひなし今二日^ふか

(二五)

三日^みか 二日^ふか と思ひしも

いたづらにして唯のこる
けふ一日のをしき日は
うらくかにてる甲板に

立ち上^ありたるコロムブス

くぼみし眼^{まなこ}悄然と
飢ゑたる如く陸をまつ

姿は狂と人やみむ

(二六)

櫛風沐雨いくたびか

死地を犯して進みたる

運命今はけふひと日

思ふ陸地の見えすして
吾志破れなば

此身も共に破れなむ
それよかしこはわが墓と

ひやくかに見る波の上

(二七)

無心の水に伴ひて

漂ひ来るひとまとの
枝に青葉は生ひ茂り

なりし木のみもうるはしく
あやしみ臨むうしろには

いつの程にか見もなれぬ
小鳥のむれのつごひきて

歌ふ帆架のこゝかしこ

(二八)

かの鳥の音はわれくが

心はげますこゑなるぞ

この木の實こそやがてこむ

成功の實を示すなれ

みえねご陸は遠からじ

勇めといへば水手等も

* * * * *

げに烟眼けんがんのコロムブス

彼を助けて進まばや

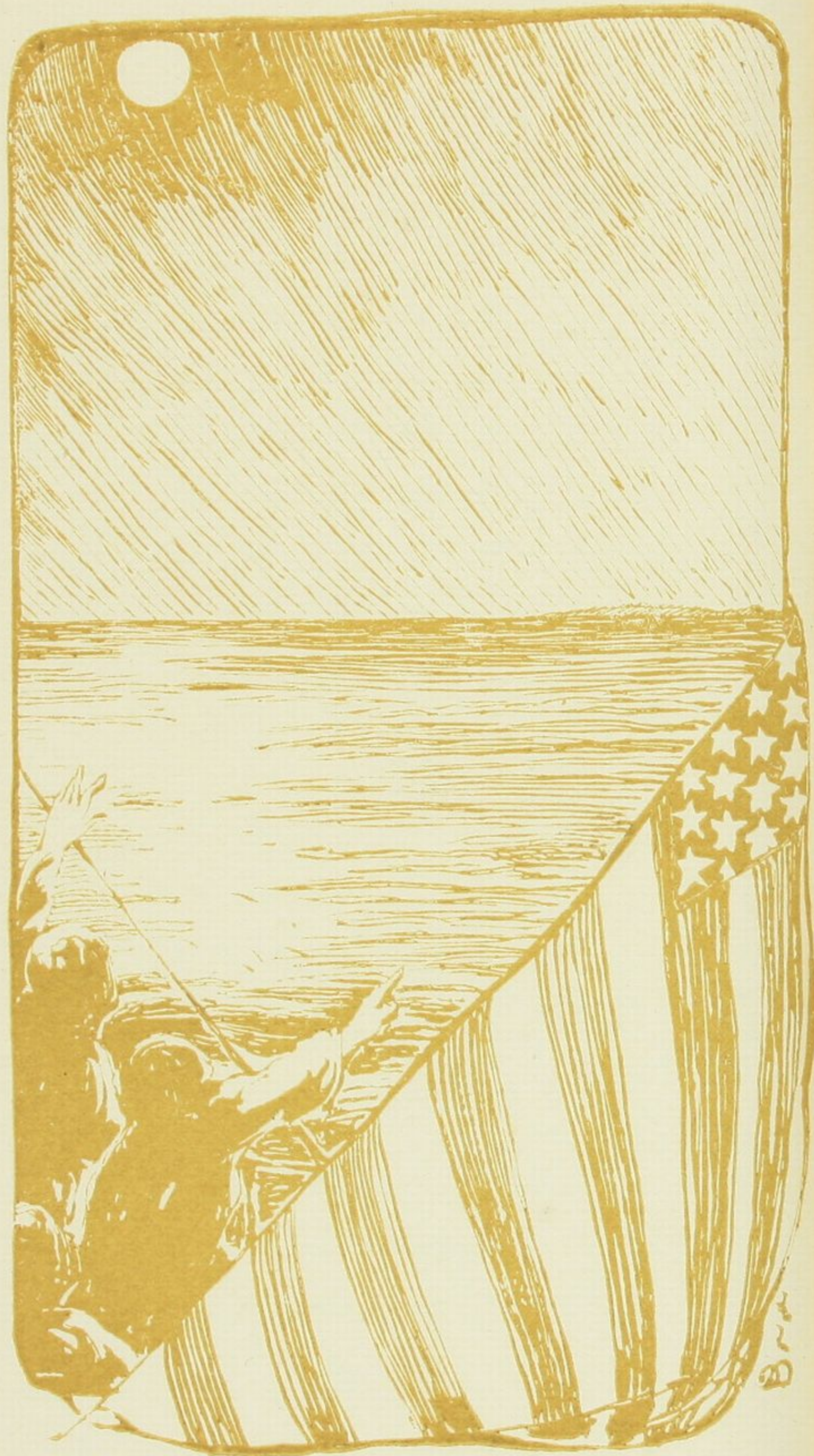
(二九)

いさむ順風いさむ船

いそぐ五十里日はくれて

孤月一輪天高く

晩潮散つて玉となる



陸よ陸よと叫ぶ聲

へさきのほとり忽に

陸よくと叫ぶ聲

はせいで見れば水天の

界はたしてうすみどり

(三〇)

かくとみるより船子等は

謹呼をあげて躍り立ち

やがて額を坐につけて

謝するひとりの膝のもと

今まで君を怨みたる

井蛙の見のはづかしさ

わがコロムブス願くは

われらが罪をゆるしてよ

三二

あくれば十月十二日

あさひさしそふ島山の
入江のいそに船つけて

みれば緑樹りよくじゅに鳥うたひ

吾を訝いぶかる銅色の

土人のさまも珍めづらしく

水手をあとに従へて

岸におり立つコロムブス

(三二)

まちし陸地をふみしめつ

思へば過ぎし年月の

困苦のしるしあらはれて

創見したる新世界

天の恵と土をなめ

岩を抱きてうれしなき

その喜びは島の名に

今ものこれり²神のみすくひ

註

1、西暦千四百九十二年十月十二日

2、「神のみすくひ」原名は「サレサルヅアドル」
○コロムプスは伊太利音コロムボ今しばらく通俗に従ふ

○君ごわれ

(一)

松のはやしをかすめきて

風さへにほふ岩¹瀬川

いましもすぎしゆふだちの

名残もしるき水のおと

(二)

月²見のやまのかたほとり

木のまにたてるたかごの

欄おは干しまちかくたちよりて

うたよむ人よ誰ならむ

(三)

清き流れを渡りつゝ

開きしふみをさしおきて
かきねのほとりわがくれば

君もかごにぞ立ちいづる

(四)

手を携へて君とわれ

たどるやいづこゆふ風の
吹くにまかせてをちこちの

野邊をさまよふたのしきは

(五)

君とかたるも今なれや

あすはつくしの旅のそら

うみやまとほく隔つとも

いつか忘れむ此の遊び

註

1 2、地名なり

○王照君

あやまられたるうつし繪の
恨みにまさるかなしさは

そのうつし繪に似たるまで

鄙びにやつれしわが姿



○沖の嶋

伊豫國

土佐國

鵜來島

沖島



(一一)

おほうな原に日は落ちて

秋風さむき沖の島

友をおくりてこよひしも

しまのはまべにきて見れば

(一二)

夢よりうすきをちかたの

伊豫のみさきに雲迷ひ

中にうかべる水どりの

鶺鴒うぐいす來しまやま浪白し

(三)

今宵かぎりの別れぞと

名残を惜む船の中

迭かたみにかはす盃の

數はやうやく重かさなれど

酔よをたすくる糸竹の

(四)

樂しき聲もたえてなく

をりしもいづるふしまちの

月のみひとりさえ渡り

(五)

さびしき空をながめつゝ

いざ別れむと立つときに

忽ちとほきものゝねの

風のまに／＼きこえくる

(一六)

岸うつ浪にかきあはす

三筋みすぢのいとのしらべには

送れる吾もおくらるゝ

友もしばしは立ちとまり

(一七)

みやこの空も白くもの

かゝる濱べにいかなれば

やさしきこゑをきくものか

あれよびこよと促がしつ

(一八)

ほごへてきたる人かげに

再び開くさかむしろ

いざこなたにと誘へば

おもはゆげにもたちいでし

(一九)

よそぢあまりの歌妓うたひめの

いろかも今はあせたれど

清き姿におのづから

花のむかしぞしのばるゝ

(二〇)

しめなほしたるいとまきや

ねじめをためす撥音はらおとの

ふたこゑ三こゑなるよりも

まだきにこゝろうごかされ

(二一)

やがてかきなす三つのをの

ひとすぢごとにものおもひ

つゞいて歌ふうたのふし

其節ごとに怨あり

(二二)

絲にまつはるほそ指の

とけてはからむしらべには

もろちの胸のうき事も

たゞひと時にいでぬらむ

(二三)

高くあがれる一のねは

苦うつ雨とあやまたれ

低くせまれる三のねは

かこちごとくぞ聞ゆなる

(二四)

或は高くまた低く

みだれまじはるありさまは

ま玉しら玉まが玉の

たばしる音にことならず

(二五)

樂しむ時は春つぐる

谷のうぐひすなつかしく

愁ふる時は秋のよの

いその松風ものかなし

(二六)

谷よりいでしいにゆく

川のはやせもせかれては

しばし流れのうちよごみ

聲なきうちに聲ぞある

(二七)

うらみに絶えし三つのいと

またかき鳴らす勢は

矢なみつくろふものゝふの

こてに霞のちる如く

(二八)

ひとふし高くうちなして

ばちもつ指をとゞむれば

あたりにも人のこゑもなく

ふけゆく月のかげ寒し

(二九)

しづかに撥をさしをさめ

えりかきあはせゐなほりて

とほるゝまゝにしのかね

すぎこしかたのものがたり

(三〇)

妾ももとはおほ江戸の

花のいろかもよしはらや

にほひに迷ふひとくの

うかれ廓にそだてられ

(三二)

つぼみの花の初より

まがきのうちにうつされて

習ひそめたるうたまひを

早くも人のもてはやし

蘭麝らんじやのかをり袖にとめ

(三三)

よそほひなりていで行けば

さかり過ぎたるうたひ女めも

うらやましげに打ながめ

(三三)

おぼろ月夜の花のもと

こゑもなまめく戀うたに

たましひとけしうかれをの

與ふるこがねうづたかく

(三四)

ひとさし立ちて舞ふときは

軽くあがれるくれなるの

もすそのうちにいくたりか

をのこの心つしみけむ

(三五)

今をさかりのよざくらや

心にかしるくもしくなく

かなしみ知らぬ吾身にも

うき世の秋はめぐりきて

(三六)

風のこしちにうち臥しし

母はよみぢの人となり

力とたのむ弟は

いくさにいでるかへりこず

(三七)

行く年月に關もなく

鏡に老いのかげそへば

まねく使もかれくに

門にはおふる八重むぐら葎

(三八)

ひとりくらしのおけくれの

心ぼそさにこそ冬の冬

きぬあき人のつまとなり

紀のくにまではきたりしが

(三九)

また其の國をふなでして

うれしき日にも淡路しま

昔戀しき内海や

しほやくけぶりみつの島

(三〇)

伊豫のゆげたの數しれぬ

うき目のはてはつひにまた

こがねのほかになき

その商人に見はなされ

かちをたえたる釣船の

いづこにたよるすべも無く

すゑのゆくへも白浪に

打ちよせられし沖の島

(三一)

月すむ夜半はことさらに

ありしむかしのしのばれて

むねにあふるゝかなしさを

あはれと君もおもひてよ

(三三)

糸のしらべのゆかしきに

なほ味氣なきみの上を

きくよりわれもなにぞなく

袖に涙のうちしぐれ

(三四)

小島のはてにさすらひし

同じうき身の君とわれ

けふこの船にゆくりなく

遇ふもすぐせのえにしかや

(三五)

われも思はぬ讒言よこごせに

罪なき罪を蒙りて

このしまもりとなりしより

はやふたとせを過ぎにけり

(三六)

やまひがちなるおきふしに

憂きを忘るゝ糸竹の

しらべもたえてあら磯や

浪のみ騒ぐ沖の島

みぎはに近きふせいほの

(三七)

かやがのきばに月低く

かごをめぐれる枯れあしを

渡るか風のこゑすごし

(三八)

島のすまひのわびしさに

さすがむかしの忘れかね

みやこのかたをながむれば

雲井にかへるほととぎす

(三九)

はてしも知らぬうな原を

みるもかひなし今はとて

とる盃にしばしまた

胸のくもりをはらへども

(四〇)

たま〜きくはあまの子が

こゑもだみたるあびきうた

たいくりかへすつり糸いとの

たえてなぐさむふしもなし

(四一)

こよひの君がつまおとに

むすぼほれたるわが胸の

はじめてとけしうれしさは
なにとたどへむいざや君

(四二)

いまひとたびは吾がために

たへなるしらべ聞かせてよ

きみがかたみに吾もまた

うたひつたへむ「沖の島」

(四三)

わがまごころにほだされて

またとりなほすほそぎをや

聲もやさしきさく駒こまの

いともたへなるつまびきは

(四四)

さきのしらべにひきかへて

なほぞみにしむうたのふし

なみゐる人もおのづから
かほをそむけてことばなく

(四五)

つゝむとすれどひとしづく
かゝるなかにも殊にまた
ぬれしは秋のゆふ露か
沖の島守そでさむし

註

此篇は唐の白樂天の作 琵琶行の翻案なり

1 内海は小豆島(讃岐國)にあり みの島は伊豫國大島おほしま大三島おほたけしま伯方島の總稱なり





としや坊やのや坊やしる

◎母子

子

かーちゃん御覽よ向ふから

どーちゃんに似たをぢさんが

もしや坊やのどーちゃんも

たぐさん／＼あるいてる

歸つてくるのぢやあるまいか

母

ゆふべもいつてきかしたに

はや忘れてかどーちゃんは

そんな所にもやしな

あれおざしきの佛だんに

お祭りしてあるあの位牌

あれが坊やのどーちゃんさ

子

だつてざしきのお位牌ゐはいは

なんにもものをいはぬもの

坊やをだいてもくれぬもの

まことのうちのとーちやんを

つれてかへつて頂ちやうだいよー

よーってばよーかーちやんよー

母

またかーちやんをなかくすのか

とーちやんはねーよーおきし

今度旅順のたゝかひに

名譽のうちじに遊ばして

いまはあのよな佛だんの

位牌におなりなすつたよ

子

なにとーちやんは佛さま

坊やはいやだよ

とーちやんえらい死ぬものか

そりやかーちやんのまちがひさ

いよく死んだか死なしいか

あのをぢさんにとふてみよう

子

をぢさん坊やのとーちやんは

今度旅順のたゝかひに

死んだといふがほんとなの

* * * * *

(母) おやまー此子とした事が

むやみにそでをひつぱつて

よそのおかたをぶしつけな

士官

いしき坊やは何がいる

なにそーちやんをよんでくれ

そのそーちやんはかへらない

坊やおきよ近ごろは

日本と支那どのおほいくさ

日本がまけちやゝゐられまい

同

だから坊やのそーちやんも

敵兵あまたうちころし

自分も立派に倒れたさ

これからついでをぢさんも

支那兵うちにゆくところ

坊やよいしかわかつたか



後篇 短歌集

四季の部

◎ 春

山家新年

日のみはたいざとくあげよ玉たつと
ふもこの人に先ぞしらせむ

子

いしよそんならをちさんも

支那兵殺しにゆくのかい

坊やもゆふべ縁日に

買つてもらつた鉄炮を

さげて今からでかけよう

いつしよにいつて頂だいな

新年の酒に酔ひしれて

いざやこら君が代いはへそこにきし

鄰ごなりの犬もともに吠えずや

立春

かるみ行く雪に軒端のきはのくれ竹の

ひともとはねて春たちにつけり

若菜

君がその喜びみむと道すがら

袖ぬらしつゝ若菜つみにき

霞

姉をよび弟いろこをよびて人去りし

あこ長閑のどかにもゆふ霞たつ

山路霞

みえざりし外山ごやまの松も見えそめぬ

吾もかすみの人となりけむ

鶯

垣こなりごしに隣こなりの人も立ちてけり

園その生ふにきなく鶯のこゑ

春雪

あわ雪は庭にふれしど梅がかの

もれくる窓はとぢむともせず

友の出遊をすくめて

山路やまぢには梅のしづえもほころびぬ

いつまで君は風厭ふらむ

柳

春風のふきそめしよりわが如く

かごの柳のいとまなきかな

同

いつもどの軒ばの柳みえそめて

なほ道長ききみがいへ哉

柳隨風

さむからぬ春の夜風よかぜのひと吹きに

したがひそめつ青柳あざなの絲

若草

今すぎし人もやくしに忘れけむ

ハンケチにほふ若草のうへ

春曙

ねくれたれの髪やはづらむさほひめが

かすみのとばり暫しひらかぬ

浦春月

もしほたくけぶりのすゑか月影も

かすみそめたりしほがまの浦

春月

やしありて窓の火きえぬ木蔭こかげには

おぼろ月夜にまめ人の泣く

春雨

あさいして起きなむとする枕邊まくらべの

小窓のほとり春雨はるさめぞふる

春風

はるかせにかざしの花はゆらげども

ほくろむねがほ覺さめむともせず

桃

見もなれぬ紫の緒せの下駄一つ

もく咲さくやごにぬきすてしある

春月

あめつちの間に迷まよふ花のかの

つもりてかすむ朧おぼろ月夜か

春眺望

遠とほざかるかすみの山におのづから

廣ひろくなりゆく春心はるこころかな

歸雁

つがひ來し雁はつがひに歸るなり

われのみひとりかへるべき身か

歸雁幽

ありと見ればありとも見えつたそがれの

霞のそとに消ゆるかりがね

燕

つばめだに去年の古巢は忘れぬを

たのまれぬかな世の人ごころ

春駒

たてがみを朝風ふきて春の野に

いばゆるこゑや甲斐のくろこま

雉子

きいす今なきしと思ふ足もとの

左はやけの右は谷川

春野

人の骨いでたる野ともおもほえず

風あたくかに蝶の舞ふころ

桃花

かたすみにもローもある店のうらの

桃咲くかげにももの洗ふころ

汐干

吾肌はだの白きをほこる三千の

花ひととときにさく干ひ漉がたかな

蝶

あとになり前さきになりつゝ一里半

はなれぬ胡蝶なつかしきかな

蛙

ゆく雲をのごかに眺め春風に

背せなをならべて鳴くかはづ哉

菜花

停車場ていしやばをくだりて土橋いほし三つ行けば

わがふる里の菜の花の春

躑躅

この道をかき行きませとさし示す

袖にてりそふいはつしじかな

牡丹

いろくの花の魂あつまりて

一つにさきしふかみぐさかも

山吹

紅皿べにざらのうち捨てある垣のもとに

一重ひとへ山吹さきかくりけり

初花

こぞうるし若木のこさる四つ五つ

初花はつはなざくら笑みそめにけり

尋花

こがねつむ才こそ無けれ世の人に

花見る事は遅るべしやは

盛花

甘き餅うらぬ店なし八重ざくら

さかぬ門なし両岸の春

山花招人

谷川に流れいでぬる一ひらは

たづねこよてふ花の心か

遠山花

をちかたの高嶺の花の雲に似て

心もそらにあくがるしかな

鄰家花

吹く風のかをりもつらしなかくに

たをるよし無き花とおもへば

深山花

忘れぬ花のかをりにひかれてぞ

木のま深くも迷ひいりぬる

落花

紫のもすその風もかをるまで

落花らくかのうへをふみわたる哉

同

ひと盛り過ぎてははらりく散る

花のすゑみてさとらぬか人

散りゆく花をしみて

わが心雨にうたれて花と泣き

風に吹かれて消えむとぞする

藤花

藤の花さきたる門かどにたちいでし

人よぶ人の色もあせたり

江上暮春

流れゆく花は真菰まこもにとめられて

別れがてにもくるゝ春かな

暮春

花に泣いてわが詠よみし歌十八首

めづる人なく春ゆきにけり

暮春夕

花はちり水は東みぎしに流れつゝ

ながきはるの日くれなむとする



◎ 夏

首夏

法の師のりが花を吊くむらふふづくるを

しづかにふくやはつなつの風

更衣

ぬぎかへし卯の花がさねほこりに

となりの白痴はぐちまたきたりけり

窓新竹

ふく風のおとはたしねごゆふ月に

影うごくなりまごの若竹

薔薇

けさこそと思ひさだめて露ふかき

うばらをつつし言ひいづるかな

朝梅雨

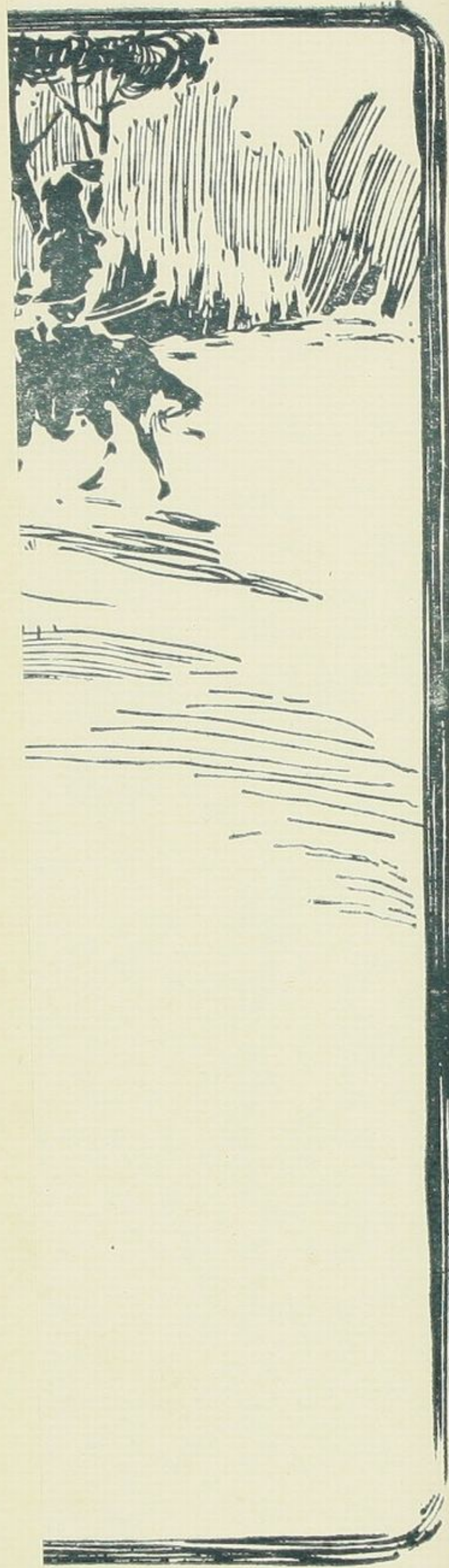
さみだるしあしたの野路のぢを書提ふみさげて

通ふふたりはあはれ誰たが子ぞ

夕梅雨

さみだれに衣ころもはぬれぬよしさらば

今宵こよひは君が言ふにまかせむ



手むるゆ

別墅梅雨

もれぎししピヤノもならずそのぬしも

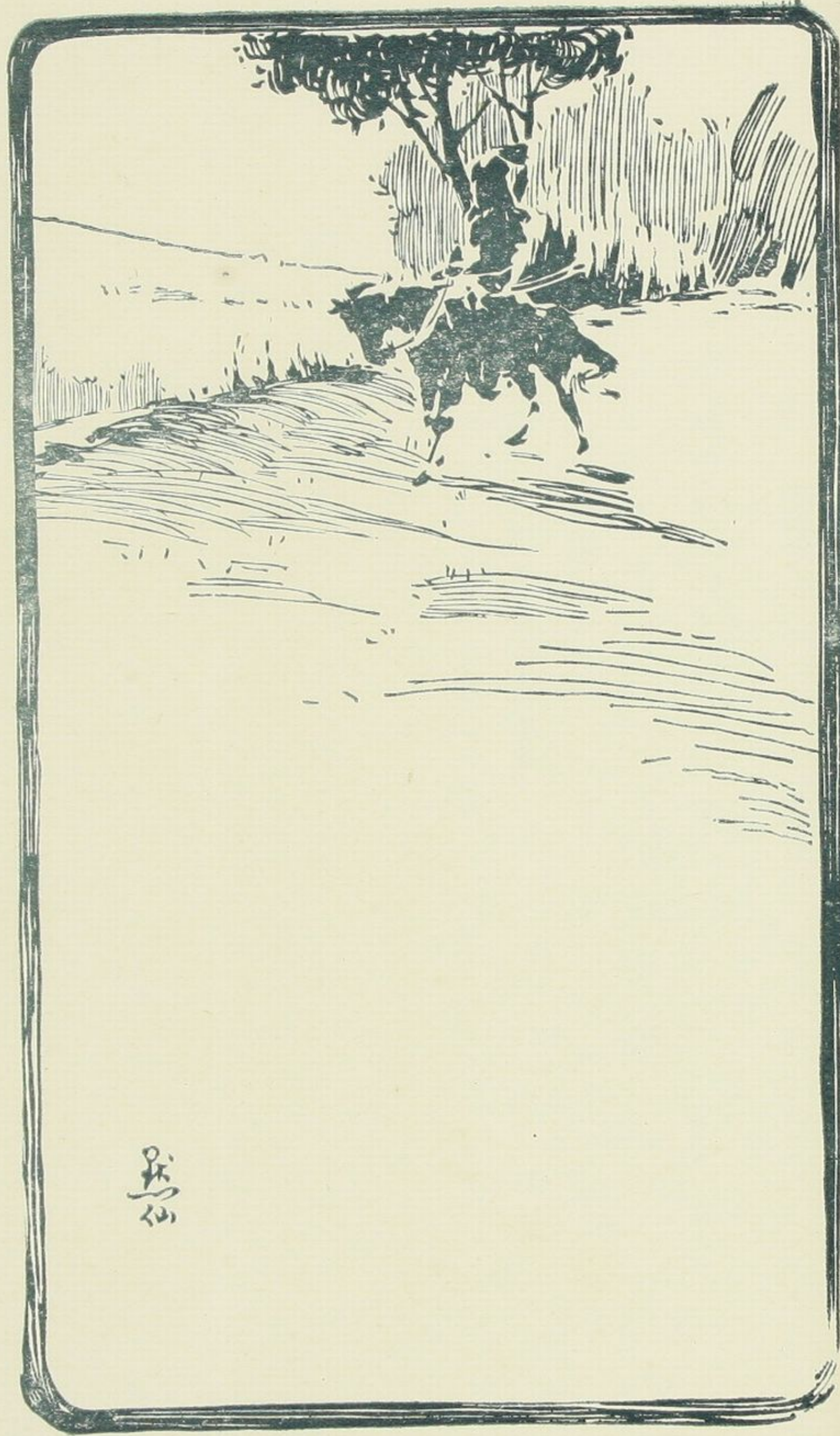
あるかなきかのさみだれの宿

船中梅雨

ゆくさきもたのまれねども五月雨に

泊るも憂しやさすらひの船

曉杜鵑



舟心

舟に網手むるゆ

別墅梅雨

もれきししビヤノもならずそのぬしも

あるかなきかのさみだれの宿

船中梅雨

ゆくさきもたのまれねども五月雨に

泊るも憂しやさすらひの船

曉杜鵑

いにしへに似たる十戸じゅうこの山里の

あかつきやみに杜鵑ほととぎすなく

馬上郭公

おのづからゆるむたづなに吾駒も

耳そばだつる山ほととぎす

莫杜編

國をいでし夫つまのたよりもたえづくに

もの思ふゆふべ郭公なく

さ苗

さなへとるごよみの中に唯ひとり

歌はぬをとめあはれなりけり

蚊遣火

問はれなば煙といはむ蚊やり火を

へだてし君にむかふ涙は

納涼

日は入りぬ風は起りぬいざさらば

うらの小川をがはにたもと吹かれむ

湖上納涼

ふなばたをうちて歌へばゆふ風を

おくりて答ふ竹生ちくぶしまやま

別墅夏月

はしためは戀かどわれをとめ來くなり

若葉がくれの月に閑ひまくれば

夏月

涸れかゝるうたの泉もこよひこの

すゞしき月によみがへる哉

夏草によせて

直き道おほひふさげる夏草を

わが利鎌もて刈らむとぞ思ふ

夏草

夏草のしげれるやごにはしるして

世を笑ふ口二つ開きぬ

夕顔

あすの夜はこれを葉に尋ねまし

いづるかきほの夕がほの花

同

あひみてしむかしの暮ぞしのばるゝ

ぬしなきやごのかきの夕顔

蓮

酒のみてみべき色にはあらぬかな

枯葉三分の吾いほのはす

蟬

せみのこゑしぐるく杜のひろまへに

牛かどみれば人眠りけり

同

とだそたる讀經のこゑのあとうけて

ひとときは高く夕蟬のなく

夕立

馬ひとつ主人顔にもたてるかな

ゆふだち避けしあせ道のいほ

扇

四とせへし學びの友とおもほえば

た馴れの扇すてがたきかな

同

葡萄^{ぶどう}たるく軒端^{のきは}にかたらへば

妹^{いも}が扇の風にほひつゝ

川納涼

なき友と遊びし川にけふもきて

けふも涼みぬ檜の葉のかげ

晩夏

ひろき世をせばき都にかへる身と

思へばをしき夏のくれかな



◎ 秋

初秋風

けさよりは鳥の羽音もさやかにて

膚はだにぞしむ秋の初風

萩風

かごみればかごに人なし裏見れば

うらにも萩あきのこゑのみにして

萩

庭下駄の音とまりて柴のかご

あくとき萩のつゆちりにけり

萩驚夢

ふる里に歸りし事はゆめにして

枕にそよぐ萩のうは風

桔梗

秋風をたがすみわぶるやごならむ

垣にたほるしきちかうの花

朝顔

髪はまだとらのへねども聞のそを

あけてまづみる朝がほの花

葛

一つかへり二つかへりて秋風の

ゆくみちしめすのべの葛の葉

後の朝顔

蔓^{つる}もはや半ばきばみて二つ三つ

花ほそるなり垣の朝かほ

月下露

月かざしやどす千草のつゆみれば

野邊にちりしく星かどぞ思ふ

蟲

ふみ迷ふその足もとに蟲なきて

かへらむとすれば道はるかなり

荒庭虫

城亡び人は去れども糸竹の

しらべに通ふ虫の聲かな

秋風

鏡みておごろく人のおとがひの

ひげふく風に秋さむきかな

秋風

ながむれば玉關ぎよくわんの東くもとちて

草もなき野を秋風のふく

秋田

肥えし子がゆふけせむとていそぐなり

いなほ浪だつ小田のあせみち

古戦場蟲

紀念碑もおほふばかりのくさはらに

うらむがごとき虫のこゑかな

薄塵風

曉^{あき}かせになびくすすきのひまよりぞ

また現はるゝ入りかたの月

秋夕

何ゆるにかなしき秋としらねども

夕風ふけば涙なりけり

秋興

梨の木に肥えたる馬をつなぎおきて

木^このみとるなり里のわらははべ

秋雨

山家集ひらかむとすればにし風に

ともしびきえて秋の雨ふる

月

てる月にいざうたよまむ浮雲^{うき}の

うきたるとみはよそにみすてゝ

月前琴

月きよきさがのく徑路こみちかすかにも

むかしをしのおつま琴のこゑ

残月幽

あれはてしふるき都の山のはに

心細くも残る月かな

月

こよひまでうたよむ君としらざりき

月みてともに遊ぶ川ふね

臥待月

ふしまちの月もいでたりこよひなほ

いく時またば君はきまさむ

十三夜

のちの夜ぞあはれはまさる野邊の月

みる人まれに風さむくして

雁

風あらししのはらすぎて山本の

霧にむせぶか初雁のこゑ

同

初かりはことづてもせで過ぎにけり

雲のあなたの人いかにぞや

霧中遠帆

うな原や博多の沖の朝きりに

もろこし船のほのみゆるなり

霧

ひと一人わが前^{まへ}過ぎぬまたひとり

にほひゆくなり野路のゆふざり

初雁

すきまもる夜さむの風もみにしみて

枕に近しはつかりの聲

鹿

ゆふ風になきつゝ鹿は下^{くだ}るなり

ふもこの寺の經^{きやう}きかむとて

嶺鹿

みねよりもつもる思や高からむ

峯上をのへにたちてさをしかのなく

掃衣

すすきはら右になびけば近くなり

左にふけば消ゆるよぎぬた

秋夜憶友

長きよの夢はねざめに中たえて

二たび三たび君をみるかな

菊

菊をかひてうるはしき人かへるなり

市街まちはなれたる杉がきの門かど

同

二もとの籬の菊の枯れぬまに

わがここの著述をへむとぞ思ふ

菊花艶麗

まねかれてふたしびわれは驚きぬ

君がおもわに似たる白ぎく

紅葉

垣もなきふせやなれども谷あひの

もみぢの錦いへつゝむかな

夕紅葉

十丈じゅうじょうのわがかけひきてかへるなり

もみぢばにはふつたのほそみち

紅葉

吾庭のひと本はこそ紅葉しぬ

みやこのうちも秋はきにけむ

秋の日野邊遊びして見たるがまゝを

柿二つこずるに赤くのこりけり

傾かたむきかゝるふせいほのそと

暮秋

虫のねものべのちくさも戀人も

かれつゝ秋もくれむとすらむ

同

かね一つなればもみぢも一はちる

此ゆふぐれに秋はいぬめり



◎ 冬

初冬

うすぶすま今よりさらに寒からむ

やぶれしまごに冬の風ふく

時雨

こよひ亦またみ三たびしぐれぬ君がこし

ふもとのおちばいかにぬれしぞ

落葉

昨日みしとなりの紅葉けさはわが

庭の錦となりにけるかな

殘菊

くりやには冷えし酒ありまがきには

のこる菊あり我いほのふゆ

落葉

さきにゆく君が肩にもおちばあり

わが帯のうへいく葉つもれる

時雨

ひとりきくねざめの窓のさ夜しぐれ

今の心を誰にかたらむ

寢覺時雨

窓うちて霰まじりにしぐるめり

寢覺がちなる冬のよひく

冬夜

雪のよにわがころもぬく母あはれ

此子のちしは牢にありてふ

月出寒山

冬の峯けづるとがまの月かげに

のこる梢もあらじとぞ思ふ

霜

此一句とはまほしさに道芝の

霜ふみわけてかぞ敲くかな

同

うれしくもとひし君かなきこりだに

まだあとつけぬ朝霜のみち

枯野

草も木も色なきのべのゆふかせに

なにうそぶくぞ瘖せしうた人びと

寒草

ふたつぼの我中にはの草かれて

つくるの前にもるものぞなき

寒蘆

かたゐらがたきびのけぶり迷ふなり

はま風そよぐかれあしのもと

寒松

あられうつ北まごすこしあけみれば

みさをにたてる 峯の松かな

推柴

戸をあけてつみししひしばぬきとりて

枝をりたきてまた語るかな

冬月

なにもものしくすてしぞ月かげも

氷るおほ路にみごり子のなく

木枯

子等よいざにはのおち柴ひろはすや

山ふきおろすこがらしのこゝろ

爐火

うづみ火をとりかこみつくけさつきし

新聞はくに読みきかすかな

冬月

雪をけて敗軍の將かへるとき

アルプスの峰に月入らむとす

水鳥

つしの音ひとつひびきぬ鴨さびぬ

あしまをわけて舟こぎいでぬ

網代

宇治の瀬を今かしのすぎぬらむ

網代のかかりやしきえてゆく

霰

わたごのに兵士^{つはもの}あまたよせたりと

ゆめにきくしは霰なりけり

初雪

とくおきて初雪みればゑのころは

早くもにはにあとつけしかな

雪

のも山もひとつになりて天地の

はじめに似たるゆきのあさかな

同

三たびとふ人のこころにつむ雪の

重き杉戸をあけそむるかな

鷹狩

手にするしたかのうは毛もかへりぢの

かたのく小野^をによあらしぞふく

月前雪

しろがねの外ほかにもものこそ無かりけれ

月のよすがらつもるしらゆき

早梅

わがごとや心みじかきにはのうめ

春もまちあへずさきいでにけり

歳暮

家をうり饑ゑし子つれてゆくみちの

いづこに年はくるくなるらむ

埋火

君と語る此四疊半のごかなり

夜半よはの吹雪もしらぬうづみび

待春

かねもなく負債もなくて柴十把

つみたるいほに春をまつかな

除夜

ひとよへば筆あらためてまた書かむ

みなみの窓のつくろきよめよ



○ 雑 部

◎ 天 地 類

天

限りなきみそらのはてを思ふとき

人よりつよきものみえにけり

星

いへの子は眠れどひとり起きいでし

仰ぐ帝坐のこころもとなる

風

うたへごもうたひつくせぬ山里の

さびしさうたふ風のおとかな

夜雨

雨のよにかたりしをりのしのばれて

また雨のよになげくなりけり



山

山に入りて一息すれば俗氣消え

ふた息すれば詩氣みちにけり

野

淺茅生の野中にちれるくれなゐは

狂女がさきし扇なるらむ

杜

さけのせし船は小川にとめおきて

たすの杜をよるかへるかな

道

玉ぼこの都の道はやせ馬の

しもとに死ぬる所なりけり

湖

さかさまに浮ぶ百二の樓臺の

かげゆらぐなりみづうみの上

島

人もなく木もなき島のいはかげに

ほばしらなかば水いでにけり

迫門オサド

萬噸の黒ふねすぎしあとならむ

ゆふ浪高き早ともものせと

瀧

仰ぎ見る大瀧のほとり風なきに

松が枝うごき岩躍りけり

川

流れゆく水にうごかぬ吾かげを

くらゐみじかき人なげくめり

池

あやうしと助けをよべごほくゑみて

池の小島に君は立つなり

温泉

なまめきていでゆに通ふ唄ひ女を

うらやむさとの子等あはれなり

寺

托鉢たくはつの僧かへるなり寺の戸の

龍のまなこに夕日さすころ

和泉國濱寺に遊びて

松かげに吾われひとりねてながむれば

かなたにねたる淡路しま山



◎自然物類

鶏卵

あたしかきとりの子ひとつさぐりえて

はしきわらはめはせいにてけり

鶴

そののつるの千代よぶこゑにねやの戸を

にほひやかなる人あけにけり

雀

空氣銃もちてわらはの近づけは

一枝たかく雀あがりぬ

虎

風おこす力もつきて檻かりのうちに

牙かむとらのこゑあはれなり

象

人の子は立ちさわげども大おほきさの

鼻のうごきはのどかなりけり

猫

ねすみとるわざはなくしていたづらに

こびまつはるや今の世のねこ

同

世の民は近づきがたきあて人の

膝をも猫はけがすなりけり

鯨

はくうしほ百尺たちて山の如き

くぢらのせなは現はれにけり

蜻蛉あきつ

うせし子のおくつきさへばゆふ風に

赤きあきつのきて遊びけり

鮒

みつばかり小鮒をつりて夕ぐれの

道いそぐなり湖の岸

鯉

そりばしに立ちて手たしくたをやめを

かしらもたげて鯉ながめけり

鯛

鯛ひとつ市にもとめてかへるなり

あすたつ君をあるじせむとて

平家蟹

矛あげて走る小蟹のせなみれば

七百年のうらみきざめり



苔

豆の如き人みおろして眠るなり

いはほのうへのこけのむしろに

萍

うさくさの動きしあとのさ々なみに

高ねのかげもまた動くかな

竹

笛のねに通ふもうべなむら竹の

ほづえにさやぐ夕ぐれのかせ



岩

谷ふさぐ千びきのいはもはひまをふ

かづらの根よりわれそめにけり

金

こがねつめるとほしまのふねつきにけり

君がみあれをいはふこの春



◎ 雑品雑事

太刀

いさまあれば父がつたへし太刀ぬきて

やまと心をふり起すかな

杖

國のため今ひとたびときほへども

子等はとゞめてつゑもてといふ

簾

どのもりのいろのくろきや笑ふらむ

たまだれもるしうるはしきこゑ

藥

土つきし袖うちおほひほそ露路に

藥おとししゝをとめ子のなく

酒

とみも名も豈にしかめやと酒めづる

詩人のこゑに泪ありけり

書籍

君はなほ知らねご君がふみをみて

三年みごせのともとなりなにけるかな

筆

この筆をうたよむ人が動かせば

この世もともに動くなりけり

寫眞

かゝるときかたらば憂さもなぐさまむ

君よと呼べごうつしゑにして

同

ゑみかするこのうつしゑを眺めつゝ

何とて落つる涙なるらむ

電燈

花の如き電燈のもと君は今

長椅子ソファによりて吾が詩みるらむ

自轉車

三つ二つかねうちならし自轉車に

よききぬ着たる商人ちかひこのゆく

新聞

戀しらぬ人は笑ひてよみすぎむ

死にし二人ふたりの三面の記事



船

海ぞくのいでくときしてふなばたに

ひらくそめ紙ちりかゝる潮しほ

晚鐘

白き手にふみひき破りなげうちて

みかへるそらや夕ぐれのかね

碁

政事談しばらくやめよ吾はいま

唯この劫こゝろをかたんどぞ思ふ

音楽

ふた月も手にとらざりしウイオリンを

君がすゝめにまた合すかな

同

よるの町看カンカン々分エーとながせごも

みる人もなきあたら若人わかひと

茶の湯

この家のいつきむすめはいでにけり
すり足ゆるくふくさはさみて

鈎

都には利をつる人もありときげご

われは川瀬に若鮎わかづをぞつる

歌

あめつちのあらむ限りは神代より

うたひししらべつきじとぞ思ふ

同

物質もの的の世をせばしと思ふ人はみな

きたりて遊べしきしまのみち

議會

三百のおもはかれど國のため

つくすまことはかはらざらなむ

病院

ひともとの庭の櫻をながめつゝ

けふもくらしぬ病院のそこ

同

神の如く白ききぬきし看護婦の

吾手をとりしのちは覺えず



◎人物人倫類

天皇

にひ高の山のあなたにすむ民も

我日のみこを打ち仰ぐなり

臣おみ

我髪におきそふ霜もおもはずて

國憂ふらむまへつ君たち

武士もののぶ

むかしより黄金かねの挺てこには動かねど

國くにときしてはかるかりし武士ぶし

老翁をきな

雨はふりぬとなりのをきなまたとはむ

よの若うごは涙すくなし

樵夫きこり

うらやまし柴しばとる賤しんはゆふかせに

かばかり物を思はざるらむ

商人あきんど

人はこず荷を負ひかへるあきびとの

袖ぬらさむとよはの雨ふる

女學生のために

いかばかりいろはよくともひめゆりの

仰ぎてさくはすすまじきかな

女

愛のつゆありてこそさけをみなへし

唯そのつゆよきよくけだかく



君

草ふかきこゑひくけれど君がよを

いのるまことはかはるべしやは

親

雨のあした風のゆふべに思ふかな

わがかぞいろはいまいかにぞと

弟の郷里にのこれるを

たまさかにたのしきをりは惜むかな

はしきいろのともにあれなと

朋友

世のさだはたゞゆふだちとみてすぎむ

たのむ木かげと君を思へば



◎神儒宗教類

社頭杉

大前の苦むす杉にふく風は

神代ながらのしらべなるらむ

加茂

まがことは唯ひとふきに消えにけり

川べのやしる風きよくして

神隨の道

文字もなくことあげもせぬむかしより

この國たみはこの國のみち



怪力亂神を語らず

あやしきはひらけ行く世に消えぬれど

消えぬ光や聖賢の道

學則不固

ふじのねにのぼりてみればけさすぎし

かのたかやまもふもとなりけり

亢龍有悔

のびく／＼てひと夜の風にをれにけり

垣をはなれし朝顔のつる

彼黍離々彼稷之苗

すぎかねてあれたるあとにたしずめば

何もとむると問ふ人もある



猶如淨水洗除塵勞諸垢

しほれ葉もちりの苦しみ免かれて

夕がほいさむ夕立のあと

爾時三千大千世界六種震動大光

普照十方國土

ときしめすのりの光に雲うたひ

山はをごりてよろこびぞする

念彼觀音力波浪不能沒

思へかの太平洋のわた中の

船にもとゞくみ佛の手を

拈華微笑

花をみて詩人等首傾くる

時に一こゑ笑ふうぐひす

今此三界皆是我有其中衆生悉是

吾子

はるかなるあまつみそらの星のうへに

すめるもおなじみほとけの子か

龍女則身成佛

龍の娘も覺り開けば忽ちに

八十種好そなはりきてふ

餓鬼道

ものすごし名利に濁く狼の

山よりいでしほえまはるこゑ

畜生道

甘く食ひ美しき衣著けんとして

おのが心を賣る人もある

修羅道

をさなきはふまれよわきはたほされて

いきもつきあへぬ停車場の口

無常

彗星の一たびうたば砕くべき

地球のうへに何たのむらむ



キリスト降誕

星一つ輝きいでしユダヤなる

里のうまやにみごり子のこゑ

郷人大聖を容れず

ふる里の人にはイエスもこだくみの

ヨセフが子かこそしられにけむ

最後の晩餐

かね故に迷ふ心か十三の

夕べのまごゑかすかかげて行く

哀しむ者は福なり

はらくとちり行く花よ此ゆふべ

ひろきめぐみのふどころにゆけ

蠹くひ銹くさり盗うがちて竊ま

ざる所の天に財を蓄ふべし

くろがねの倉も築かば築くべし

吾魂をいかゞとゞめむ

求めよさらば與へられ尋ねよさ

らば遇ひ門を叩けよさらば開か

るゝ事を得む

雲くろくよあらしすごし今は唯

かの燈火のもとにいそがむ

もし神よりいでは爾曹かれらを

亡ぼす事能はず

大いはいかたく根ざしといそ松は

世の波風をしらぬなりけり



◎詠史 附物語句題類

天手力男命 あめのたちからをのみこと

笑ふこゑたかまが原もゆるぐとき

石門いはしのわきにうでさする神

布刀玉ノ命 ふさたまのみこと

神だちがよろこびつごふ中いでし

しりくめ繩をいそぎひきけむ

道臣命

草をかり荆いはらをひらきみいくさの

君が魁けいさましきかな

豊玉毘賣ノ命

怨みつく尙戀ふ君がやさしさは

うたの中なる白玉のごと

沙本毘賣ノ命 さほ

髪は落ち御衣も破れぬかくばかり

思ひた斷たる君が心か

神功皇后

船ほさずあめつちのむたつかへむと

とつ國人もあふぐ尊とさ

仁徳天皇

大どのに漏りたる雨を思ひでし

百世の後も袖ぬらすかな

中臣鎌足

ひざまづきくつをとりたる君が手に

傾くみよを支へたるかな

和氣清麿

まかれては枕ともなる世の中の

むしろの如き志かは

菅原道真

うちずして千歳の後になげく哉

こそこのこよひをしのぶからうた

柿本人麿

君が名はときはにつきじ石見なる

石川の砂やまとなるとも

山部赤人

白雲もいゆきはゞかるみねのごと

うたの姿の高くもあるかな

安部仲麿

しきしまの道ときいでし琴詩酒の

まことゐの人を驚かしけむ

藤原道長

いかにして月をあふがむ此夜をば

わがもの顔におほふ雨ぐも

紀貫之

とつ國の風ふきすさぶ世にいでし

築きかためしうたの大道おほみち

在原業平

すぎものご名にはたてれご君がよむ

うたの奥には涙こそあれ

源義家

駒たてし指さす外山とやま風なきに

ひとりみだるしかりがねのつら

源三位頼政集をよみて

埋れ木の花こそさかね言の葉の

にほひは千代にくちぬなりけり

平清盛

かげて行く月のためしもあるものを

入のみいかで久しかるべき

湊河をすぎて

七たびは君の爲にと誓ひつゝ

死にたる人も生れこぬ世か

鹽谷高貞

妻も死に吾も死ぬなりしかはあれど

此世のほかの世もあらずやは

平重盛

忠孝のさかいに君はきはまれど

のこるほまれにきはまりぞなき

圓位上人の集をよみて

此うたをうちずしながら逍遙さうようへば

草にも木にもおもむきぞある

小澤蘆庵

まことなきかざりを捨てたゞことを

われは愛めで讀む朝な夕なに

香川景樹

新なる言の葉添へていにしへの

花の匂傳ふ枝振ぞよき

松尾芭蕉

山かはの秋のあはれを枯枝の

鴉はねにぞ歌ひいでたる

井原西鶴

好色のふみひもとけば太平の

花みだれさくパノラマのごと

近松巢林

世にまけて死にて世に勝つ人の美の

きはみを歌ふ道行の文

瀧澤馬琴

よに媚びて口を糊する戯作者は

驚き走る八犬のこゑ

爲永春水

美人たわやめのゆあみのあとか紅粉こうふんの

にほひもこもる溝みぞの春水はるみづ

福澤諭吉翁

よの人も君にならひてひとり立ち

みを尊たふごまば國は榮えむ



ナポレオン

(其一) モンテノツトの役

今碎く敵みおろして立つ人の

かしらをはらふ春の朝風

(其二) ロヂの血戦

此橋をわれにつゞけよ「能はず」と

いふ言の葉はフランスになし

(其三)モスコウの大火

もしたびをもしたび勝てど萬人まんじんの

うらみの焔けすすべぞなき

(其四)チャートルローの大敗

路みちをひらけ吾名わがなを識れるつはものが

死ぬべき時は今なるぞいざ

(其五)セントヘレナの臨終

雷いかづちと人はきくらむシーザーや

シピオと天にわが笑ふ時



項羽

勝ちほこる七十餘戦夢なれや

今漢軍の楚の歌のこる



①

人の住む世をなむるは

陶淵明

腰まげてわらべを迎へ逢ふうち

吾庭荒れむかへらなむいざ

玄宗皇帝

驚きてよばはる時はおそかりき

二十四郡に人は無しやと

顔真卿

火の如きわがまごころも見えざるか

君が眼おほふ舞姫のそで

揚貴妃

しのびかね人のすむ世をみおろせば

みやこのそらか白雲のたつ

白樂天

白俗はくぞくと誰たがそしりけむ世の人の

耳にいりてぞ歌は歌なる

一たびは卵をたてにわる國の

臣おみともなりて位うけしが

リップヴァンウィンクルの心を

(米國アーヴィングの作れる)

窓々の人に見馴れし顔なくて

犬さへ吾を吠えむとぞする

源氏雨夜の品定めになみて

よめる

杜子美

血と涙むすびて凝りし紅玉あかたまの

黄金こがねの板をほとばしるこゑ



ガリヴァー周遊記(小人島をいで

たるガリヴァーの心によせて)

その家の上中下かみなかしもは問はざらむ

たゞまめやかにしづかなりせば

功名富貴若長シヘニラバモ在漢水亦應西北サニニ

流ルベシ

むしろたゞ歌ひ遊ばむ世の中の

かれもひと時これも一時



◎ 羈旅軍事離別類

羈旅

はるかなるこしかたみれば夕日かげ

入りにし山を月のぼるめり

旅宿

かの山をひとつめぐらばふるさとし

思ふこよひはまごころまぬかな

旅泊

荒るゝ夜をいそ山かげにこぎよれば

となりの船は酒だしにけり

同

浪ちゆくうさも忘れぬ島寺に

嵐吹くよをうたがたりして

汽車

君はのぼり吾はくだりにのりてなほ

しばしだにもと窓えらぶかな

同

汽笛なる車と共に千よろづの

うれひ喜び皆うごくかな

汽船

かゝまりて二等の膳に向ふとき

隣の女めしすゝめけり

從軍

西の山のくもくれなるとなりけり

あすはこの野もくれなるにせむ

同

おなじくは敵のとりでのいたゞきに

日のはたふりてわれは死なしむ



同

シャンパンの盃どもにあぐるかな

こよひせむべき砲臺のまへ

軍艦

大づくのこゑをさまりて島かげに

八千噸のふねしづかなり

遠征

海の如き砂ふき上げて十萬の

おもてうつなりアルタイおろし

出陣

ゆく雲にいなしく駒のこゑすなり

宇品のみなどよるふかくして



留別

西風に雨のそぼふるをりくは

君を思ひの涙ともみよ

友とわかるゝとき

常に似ず酒のむわれをあやしむな

こよひ別れていつ逢ふべしや

わかれのむしろにて

しばらくはそのうたやめよさらぬだに

わかれの涙とゞめがたきを

獨逸國に留學する人をおくりて

梢ふくあらしをみても印度洋

浪安かれとけふよりは唯

同

君が行くエルベの岸にてる月も

おなじ光と秋はしのばむ



◎叙情類

幽思

ながめわびともしびつけてふみよめば

むかしの人ももの思ひけり

述懐

半町の田をたがへして米くひて

言ひたき事を吾は言ひつゝ

懷舊

子等よはげめわれにふたゝびわかき年

かへせとなげご神はゆるさず

他郷涙

三百里へだつとしれご母に似し

人みてけふも窓ひらきけり

橋かはり家もペンキとなりにけり

懷舊

飴屋のをきな今いづこにぞ

をりにふれて

今のは人をみずして榮花追ふ

怜俐まかしきものを貴女とよぶめり

同

もよせのみさを賣るはとふとまれ

ひとよのみさを賣るは笑はる

同

笑ふとも吾はうたひてすたれたる

まことの戀をふるひおこさむ



皇太后陛下の崩御をいたみは

べりて

草も木も一つしぐれにぬれにけり

おほんみはてのそのゆふべより

妹としえのみまかりしとき

うつくしきくさばなとりて遊びつゝ

死出の山路を今かこゆらむ

弟いさむが世をさりしをりにの
べおくりしてよめる

つみもなきたましひやすくねぶるらむ

松風きよきおくつきのもと

亡き祖父おほぢ(直市)のはかにまう
でし

われにふみをしへし人のおくつきに

わがかきしふみたむけぬるかな



松影映水

み園生の池にも松のかげみえて

千代に千代そふ君がみよかな

出産

いさましくなく此こゑは年をへて

世にひゞくべきこゑとならなむ

年賀

かぎりなきよはひなるかな君はいつ

王母がもくをひろひましけむ

新婚祝

こよひより枝ならべたる相生の

此松のいろ百年のいろ

賀

うれしさにことばもでねば手をあげて

たい君が代をいはふなりけり

寄山祝

むらやまのうへにそびゆる富士のねの

高きは君がみいつなりけり

淡煙一抹終

7800

明治卅五年八月廿二日印刷
明治卅五年八月廿八日發行

(正價金貳拾五錢)

不許複製

著者

都築宗治

發行兼印刷者

大阪市東區備後町四丁目七十八番邸

吉岡平助

印刷所

大阪市南區東新瓦屋町二百廿六番邸

啓文社

發兌元

東京市神田區駿河臺南甲賀町
大阪市東區備後町四丁目

寶文館